【論文】

地域で育てる、学び合う

――ボランティアを通して――

柳澤智美*・牧野郁子**・小川和弘***

キーワード：ボランティア、地域連携、サービスラーニング

１．概要

１．１　研究背景

地域の受け入れ先との関係は、大学生がボランティアに参加する際に大変重要である。現在、多くの大学で地域貢献という形でボランティア活動を推奨する事例が多く存在している。これらは、地域住民の「地域を活性化したいが、担い手となる若者が地域で減少している」または、ボランティア活動者たちの「高齢化にともない活動が続けられない」などの需要にも対応している。そのため、地元住民から、大学にボランティアの依頼を直接することもあれば、行政が中間支援組織となって大学と学生のニーズを受け、地域活動の橋渡しをするような事例もある。

このようなことから、ボランティア活動は肯定的な意見が多く、「大学生がボランティア活動をする意義」などが記載された雑誌や、「学生の成長につながる」といった研究報告も多く存在している。

だが、これらのボランティア活動を語る時、「参加する学生側」に主眼を置いたものが多い。学生側の視点で、ボランティア活動に参加することのメリットやデメリットを取り上げ、大学時代にしておくべきことの１つとして挙げられることも多い。しかし、ボランティア活動は、学生側のメリットばかりが強調されるのではなく、受け入れ先にもなんらかのメリットがなければ、その受入れは続かない。例えば、受け入れに際して失敗や反省、ボランティア学生を受け入れるNPOや市民団体、地域や社会との関係性、受け入れ先が学生ボランティアをどのように見ているか等という問いに対する検証が少ないといえる。本稿では、受け入れ先は、学生ボランティアの受け入を実際にどのように感じているのか、様々な受入れ先への調査を行うことで、その現状を明らかにしていく。

１．２　先行研究

まず、ボランティアとサービスラーニングの違いについてであるが、ボランティアは自発的な活動であり第三者の評価を必要としない。今日の大学が地域貢献として学生にボランティア活動の参加を促している多くの場合、所謂ボランティア活動といえる。この際、学生にはボランティアに参加することを１つの経験として提案し、地域には地域貢献として提供している。だが、例えば単位認定型のボランティア活動や、授業としてのボランティア活動のような場合などのように、なんらかの評価を

＊　城西大学現代政策学部社会経済システム学科教授
＊＊　社会福祉法人鶴ヶ島福祉協議会
＊＊＊　社会福祉法人川越福祉協議会

必要とする場合、サービスラーニングとする方が適切である。サービスラーニングは教育活動の一環であり、授業として評価を伴っているからである。まず、市民性を育む教育事例としてJacoby, Furco（1996）によれば「サービスラーニングとは、学生が異なる文化を持つ地域社会と協働しながら、地域社会を発展させることを狙いとした、地域密着型経験学習プログラムとされている。学生が地域に一方的に奉仕するボランティア活動とは異なり、学生と地域社会が対等な関係を維持しながら、異なる文化や知識を持ち寄り、建設的で創発的な協働作業を行うことで、学生の能力を開発することを目的としている」。このような考え方をもとに現在の大学生たちが参加しているボランティア活動は、徐々にボランティア活動から学びつつ地域社会から評価されるサービスラーニングへと変化している。

１．３　リサーチ・クエスチョン

本論文では、大学の地域貢献の１つである学生ボランティアの受け入れ先に焦点を当てていく。ボランティアを受け入れる側にとって、どのような影響があるのか良いプラス面ばかりでなくマイナス面についても考察したい。

１．４　研究目的

学生中心のボランティア受け入れの研究は多く存在するが、受け入れ側の体制や学生を受け入れたことによる受入れ側の変化など学生が参加することでどのような影響を受けたかを解明したい。ボランティア活動ではなくサービスラーニングとした場合、学生は単に参加しただけではなくなんらかの教育効果を享受することになる。そのためには、受け入れ先との良好な関係作りが必要であり現状を把握することがよりよい結果を生むことになる。

本研究は、多くのボランティア受け入れ先が、大学生ボランティアを受け入れることによってどのような影響（メリット・デメリット）を受けているのか、または目の前の課題について、どのような影響を与えたかについて研究していく。

１．５　調査方法

実際の受け入れ先の状況を知るため、筆者３名が多様な受入れ先のアンケートを行った。受け入れ先の地域も坂戸、鶴ヶ島、川越など広範囲であり、福祉施設や市のイベントなど様々な受入れ先を調査した。

２．城西大学現代政策学部のボランティア

２．１　城西大学現代政策学部でのボランティア

現代政策学部は2015年にボランティアを開始した。これは単位認定型でのボランティアであり、事前研修や事後研修などを行い、さらには学生のボランティア状況を視察にいくなどの活動をしている。学生は概ね40時間というボランティア時間を体験することになる。行く場所は、様々であり、主に坂戸市と鶴ヶ島市が中心となる。

２．２　どのような受入れ先か

ボランティアの受け入れ先は、主に市役所や社協からの紹介先が多い。また、坂戸市からは市民協働推進会議*が審査する提案型協働事業での助成が決定された先などへの参加なども、近年増えている。基本はボランティア担当教員が市や市民との継続的なボランティア受け入れ先として、知りえている先へのボランティア参加を促している。これによって、ボランティアに参加している学生の活動状況などを把握することができる。また、直接受入れ先からの現状を聞くことが可能といえる。

受け入れ先への質問に関しては以下の質問項目を用意した。

①受入れの不安はあったか
②受け入れ後、活動内容や参加者に変化はあったか
③メリット・デメリットは団体としてあったか
④良い関係を築くために必要なことはなにか
⑤今後受け入れをしたいと思うか
⑥その他
⑦いつ

以上の質問を各受け入れ先へなげかけた。他２名も同様の質問をしている。

２．３　アンケート結果

アンケートは、受け入れ先の方の思いや、感じたことや、言葉を大切にしたいため、頂いた形式のまま記載している。

表２．１　受入れ先１　坂戸竹灯の夕べ

団体名	坂戸竹灯の夕べ・灯籠流し
ヒヤリング日時	2023年12月21日
聞いた方の役職等	実行委員
担当	柳澤
1	ご紹介頂いた田中先生が学校側との間に入っていただいていたので、あまり不安はありませんでした。
2	この度の、ボランティアの学生さんは、非常に良い学生さんで、弊社社員と共にお手伝いを頂き、社員も一緒になって楽しく行う事が出来たと感じています。
3	日本文化の継承及び行事を行うには沢山の準備や苦労があることに気づいていただけたのではないかと思います。
4	目線を同じにすることだと。また指示するにも学生が自ら考え行動するように仕掛けることだと考えております。プラス笑顔！
5	是非お願いしたい。何故ならば、若い方にもっと弊社の生業である冠婚葬祭（日本文化）を知っていただき、次の世代に繋げたいと考えております。また学生さんのパワー（勢い・不安など含む）は私たちが忘れているものであり、それに気づくチャンスでもあります

＊　市民の意見及び情報を市政運営に反映させるため、審議会の設置や市民コメントなどの様々な形で市民参加を推進しています。この市民参加に関する基本的事項を調査・審議するため、坂戸市市民参加推進会議を設置しています。

6	この度は学生を３名お手伝いいただきありがとうございました。ボランティア活動を通じ何を感じたかなどフィードバックなど頂けると今後の参考にもなりますし、より一層心に届くのではないかと考えております
7	Ｑいつ＝2023年10月８日　Ｑ人数＝３名（男子）　Ｑどんな活動をしてもらったか＝灯ろう流しの作成（組み立て）及び川の中でスムーズに灯ろうが流れるようにしてもらったり、灯ろうの回収などを弊社スタッフと共に行っていただきました

表２．２　受入れ先２　竹灯の夕べ

団体名	竹灯の夕べ
ヒヤリング日時	2023年12月21日
聞いた方の役職	市議会議員
担当	柳澤
1	全くありません
2	活気づいた。いるだけでパワーもらえた。
3	実際に助かったのであると思う。
4	本当は､当日だけでなくもっと親睦できると良い｡名前もわからないので呼びかけもしにくい。
6	指示をするとサッと動いてくれたり、自ら考えて先回りして助けてくれた学生もいたりと、とても心強かったです。礼儀正しく、人間力がある子もいて息子よりも若い子と話せて嬉しかったです。

表２．３　受入れ先３　MOA美術館　坂戸鶴ヶ島児童作品展実行委員会

団体名	MOA美術館　坂戸鶴ヶ島児童作品展実行委員会
ヒヤリング日時	2023年12月19日
聞いた方の役職	実行委員会
担当	柳澤
1	教授のご指導をもとに、学生リーダーを決めて、リーダーを中心に役割を定めて責任感をもって進めていただいていると感じています。学生の方々と実行委員とは、活動の目的意識を共有し、そこに向かって進めさせていただいているという思いがあり、信頼関係を築いていきたいという意識で接しさせていただいております。また、授業、部活、バイトなど大変忙しい中、コロナなどで体調不良の方もおられた中で、ご努力していただいているという感謝、尊重、協同の思いでおります。 子どもたちをとりまく環境は、いじめや心の病など、深刻な問題があり、MOA美術館の願いでもある、生活の中で美を楽しみ、豊かな心を育てる営みを、多くのボランティアとともに進めていきたい､そのための一助としての児童作品展の開催という実行委員会の目的意識のもと、今後とも多くの方々にお力添えを頂きたいと存じております。
2	他ではあまりない、異世代連携で、苦労を共にし、協力しながら、募集から企画、広報、展示、表彰式運営までの一連の事業運営を通して達成感･喜びを共有し、一体感や、若い方々の発想、アイデア、デザイン等、学ぶものがあり、表彰式など、子どもたちと年齢の近いお姉さんお兄さんに接遇していただくことで安心感があると感じています。 ボランティアされた学生が就職の面接で体験を通して気づいた内容を語っていただいたり、卒業された学生も気にかけて設営準備にかけつけてくださった話などをお聞きして、有難く、本当に連綿と続けていき、地域で子どもたちを長い目で育て（「思いやり」や「生きる力」を身に着けるなど）ていくことの大切さを感じています。

3	全国で児童作品展は開催しておりますが、例えば、高大生のボランティアサークルの方を、展示かたづけ、展示会場の受付など、単発的に受け入れているところが多く、城西大学生のように目的意識を共有して（濃い薄いはありましょうが)、協同で開催するというところはあまりないので、大変ありがたく存じております。また、子どもたちに自信や他者への思いやりの心の培いなど情操教育に、ささやかながら寄与する活動を共にできることを嬉しく存じております。

表２．４　受入れ先４　SDGs坂戸ふれあい食堂

団体名	SDGs坂戸ふれあい食堂
ヒヤリング日時	2023年12月19日
聞いた方の役職	スタッフ
担当	柳澤
1	ありません。以前から坂戸市内在住の数人（５人）のボランティアが来てくれていたので、大丈夫だと思いました。
2	以前からきている学生たちと仲良くなっています。お互いに連絡先を交換しています。女子学生が多かったので、男子学生が参加することで、男性にやってもらえる力仕事など気軽に頼めるようになりました。
3	十分あります。若い世代が参加することで、全体に活気がみなぎります。今のところ、SDGs坂戸ふれあい食堂の学生ボランティアの登録者は17人、ラインでつながっています。
4	事前連絡などをきちんとすること。あまり、強要しないこと。ボランティアの内容を分かってもらえること。また、ボランティアの内容が楽しく、やりがいのあること。
5	今後もお願いします。理由は３の項で述べたとおりです。
6	
7	2023. ７月　子ども縁日　　４人（城西大学の学生の数字のみ） 縁日の売り子、食堂のまわりの植木などの伐採 ９月　花火と焼きそば　　焼きそばの売り子　花火の設置など　４人 10月　ハロウィンパーティー　　ハロウィンパレードの付き添い　４人 11月　キウイ狩り　　キウイ枝の伐採、掃除、３人 12月　クリスマス会　　サンタクロースにふん装してプレゼント渡す ビンゴゲームで子どもたちと遊ぶ、４人

２．４　アンケートからわかる学生と地域の関係性

以下に、アンケートの結果から、受入れ先と学生ボランティアが良好な関係が続く、共通の要素をあげていきたい。

２．４．１　信頼関係

学部としてボランティア学生を地域に送り出しているが、人間関係の構築が非常に重要であることがわかる結果となった。ボランティアの受け入れに関しても〇〇先生のご紹介なので大丈夫である等、紹介相手を信じているという回答にみることができるように、人とのつながりが重要な指標となっている。多くの社会的課題も、人との信頼関係が重要なのだと思われる。学生ボランティアが参加する際、信頼できる紹介者がいることは重要な要素といえる。

２．４．２　受入れ先メリット

学生は、ボランティアに参加することで、社会の中での自分の立ち位置を明らかにしていくことができる利点がある。社会の中で自分をどう生かすのか、自分が社会の一員としてどのような社会を望むのかを考える機会となる。そのような学生の思いを受けて多くのボランティア受け入れ先が、学生が参加することに対して肯定的であり、来てくれると活気が出るなど、メリットを感じていることがわかる。受け入れ先にとってもメリットを感じていることが受入れ継続の要素となっている。

２．４．３　緩やかな期待

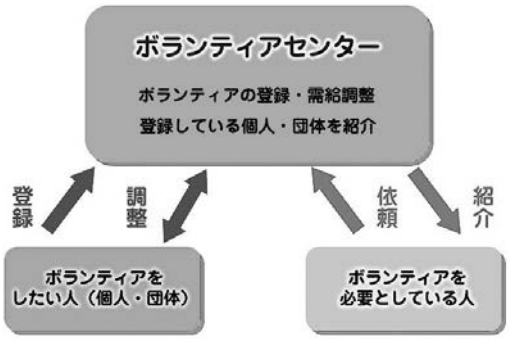
今回のアンケートで、受入れ先と学生ボランティアが良好な関係が続く要素の最も重要と感じた点は、受け入れ先が学生に対して過剰ではなく、ほどよい期待をしている点であった。つまり、受入れ先も学生と同じ目線にすることや、学生自身がボランティアに対しての思いに差があることを理解し、頑張ることを強要せずに互いに対等な立ち位置でいてくれているという点である。教育をするというよりも育てるという感覚に近い。受け入れに慣れてくることによって学生を指導しなければいけないという強い責任感から、厳しい発言や過剰な思いをぶつける事例が見られる。そのような受入れ先に対して、熱烈なファンが存在し、学生もその中で一緒に活動したいという思いになる場合もあるが、多くの学生はその状態に息苦しさを感じてしまい、短期間のボランティアで終了していた。良好な関係が築けていると感じた受け入れ先は、忙しい活動の中においても学生と一緒に成長していく自分たちに対しても、楽しむゆとりのようなものを感じ取ることができた。

３．川越社協での取り組み

川越市社協ボランティアセンターでは、みんなさんがボランティア活動をしやすい環境をつくるために、ボランティア登録制度を導入している。

ボランティア登録制度とは、「ボランティアを必要としている人等からの依頼に対して、登録していただいた個人・団体の方の活動希望内容や時間等があった場合に、ボランティアとしての活動を紹介する制度です。」† この制度の活用事例について紹介したい。

図３．１　ボランティア調整の流れ



出所　http://kawagoeshi-syakyo-or.jp/volunteer/shikumi.php

† http://kawagoeshi-syakyo-or.jp/volunteer/shikumi.php

３．１　アンケート結果

表３．１　受入れ先１　NPO法人日本語教育ネットワーク

団体名	NPO法人日本語教育ネットワーク
ヒヤリング日時	2023年12月19日
聞いた方の役職等	代表
担当	小川
1	当NPOの活動が外国籍住民への日本語支援や相談という、ある意味対人スキルを求められるボランティアのため、受け入れ側として、どのような事前準備が必要か迷いと不安があった。
2	活動内容に関して、高校生と外国籍の成人の組み合わせ等当初は無理だと思われたが､意外にもテキストをトピックに楽しく交流ができていたので､matchingも様々試行錯誤してみた。高校生が持つゲーム、アニメ等知識が外国籍住民の知りたいことだったりして、新たな異文化交流の可能性を感じた。
3	シニアボランティアに比べて、相手に教えすぎない、相手をよく見てニーズに応えようとする学生ボランティアの姿勢を見ることができてよかった｡シニアも高校生の対話力に驚いていた。世代間異文化交流にもなった。
4	グループ活動では、シニアがファシリテーターにならざるを得ず、結果として、面白いコミュニケーションになっていた。その場で何が求められているかで、それぞれ役割を創造して相談（シニアがアドバイス)、日常会話力アップ（学生にふる）等共に課題解決へと向かうように場を作る。
5	学生ボランティアを一定数、受け入れ続けるハブでありたい。今後の多文化共生の地域社会づくりに興味を持ってほしいため。
6	現会員の中には、学生の態度に不満を持つ方もいたので、価値観の違いを認めながら、自分の意見として、学生と対話する等勧めてみたが、難しい面もあった。（例えば、学生がガムを噛みながら会話する、フードをかぶったまま、裸足でサンダルなど身だしなみ面など、またシニアが学生にライン交換を気軽に申し出る等逆もあった。）
7	団体チャットで出欠を知らせる（なるべく）など、ゆるくつながっており、参加も問い合わせがあり次第受け入れをしている。定着は３名、あとは、時間のある時に連絡をして来ている状態で、もう少し市の多文化共生の協働事業を自分事としてもらえるようアプローチして行きたい。

表３．２　受入れ先２　NPO法人ファミリーねっとスマイリー

団体名	NPO法人ファミリーねっとスマイリー
ヒヤリング日時	2023年12月19日
聞いた方の役職等	代表
担当	小川
1	まったくありません
2	夏休みのイベントで、餃子作りチャレンジという企画で、身近にいるお兄さん、お姉さんといった感じで、餃子を作りながら、気さくに話している様子が見られて、参加された親子も楽しそうでした。
3	普段､学生さんと接する機会がないので､受け入れることによって､場の雰囲気が明るくなり､親からも学生さんがいると「いいね」という声も聞くので、いっそう盛り上がり成果があると思う。
4	良い関係を築くには、やはりその場が楽しかった、やって良かったと思える場の雰囲気が大切であり、上下関係ではなく、対等な友だち的なコミュニケーションを保つことで､「次回、また参加したい」気持ちになってくれることにつながると思う。
5	希望する学生さんがいれば受け入れたいです。学生さんがボランティアを体験することで学びの場となり、受け入れる側も学生さんのパワーで元気になれる部分も多々あると思う。

6	学生さんも積極的にボランティア活動に参加し、自分の将来の一助になれたら嬉しく思う。
7	８月18日の餃子作りチャレンジに参加するお子さんと一緒に手作り餃子をしてもらい、みんなでランチをし、みんなでスイカ割もしました。

３．２　アンケートからわかる学生と地域の関係性

ボランティアセンターには、ボランティア活動をするための情報提供、相談・助言、講座・研修などボランティア業務を専門に行うボランティアコーディネーターがおり、‡その、ボランティアコーディネーターという立場から受入れ先と、登録した学生さんをつなげる中間支援組織的要素を意識している。実際に社協が提供するボランティアということもあり、社会福祉施設などが多くなる。そのため学生も受入れ先も通常ではあまり関わることがない場での活動となる。受け入れ先も、学生がどのように動くかわからないと初めは不安があるようであるが、参加回数が多くなるにつれて解消されていくようである。

ここでの特徴としては、学生がボランティアに参加してくれること自体は歓迎しているが、ボランティアがいないと運営が厳しいというようなことではない。互いが頼り過ぎず共生する社会の一員として互いの場を提供している。このように、ゆるいつながりというのが今後のボランティア活動で必要な姿ではないかと思われる。

４．鶴ヶ島市社協での取り組み

鶴ヶ島市社協では、彩の国ボランティア体験プログラム‡‡の実施もあり、児童生徒学生の受入れを市内の様々な団体、施設等に受入れていただいている。今回は、特に学生の受入れに力を入れてくれた施設（認知症対応グループホーム）と学校（T中学校特別支援学級）にヒヤリングをして、若者ボランティアの受入れについてのヒヤリングを行った。

４．１　アンケートの結果

表４．１　受入れ先１　認知症対応型グループホームでのボランティア受入れ

団体名	認知症対応グループホームＡ
ヒヤリング日時	2023年12月19日15：00～
聞いた方の役職等	施設長
担当	牧野
1	感染症についての不安があるが、以外は特にない。
2	利用者さんの表情があかるくなる。ボランティアが参加してもらうことで職員も気が引き締まる。
3	交流のない世代と交流できる。利用者とボランティアが接している間に職員が仕事ができる。ないと思うが、人生経験がない学生さんなので、フォローが必要な場合がある。話が弾んでいないとき等も入っていく必要がある。
4	受入側の空気感を大切にしている。ボランティアに来た方がいやすい居場所のようなところを目指している。

‡　http://kawagoeshi-syakyo-or.jp/volunteer/shikumi.php

‡‡　https://www.tsurusha.or.jp/volunteer

5	感染症が落ち着いたら、受け入れていきたい。認知症サポーター養成講座等のリアルに接する場にしてほしい。認知症の方もやさしい等感情もあることもわかってほしい。
6	以前、初任者研修を受けている方がボランティアに来た方が職員になったこともあった。
7	夏ボラ、社協からの依頼によって、１日からの受入れ。利用者との交流がメインで継続的に受け入れをしているが、コロナ禍により現在は受入れなし。

表４．２　受入れ先２　中学校特別支援学級でのボランティア受入れ

団体名	Ｔ中学校
ヒヤリング日時	2023年12月19日
聞いた方の役職等	教諭　特別支援学級担任
担当	牧野
1	不安はなかった。自分もボランティアをしたことがあり、積極的に受け入れをしたかった。当初はダンスということでプロに近い方が協力してもらえるのかと思ったが、社協の方から学生ボラということで、それもとてもいいと思いお願いをした。
2	子ども達も学生も変化があった。特別支援の子どもたちなので、家族や学校の先生以外の方にかかわる機会がない。彼らにも私たちにも一生に残る経験だった。財産だったと思う。出会い、いつかまた出会いたいと思う。来てくれた方も時間も限られているが、中学生が大学生に教えることもあった。すべてプラスであると感じている。最後の大きな舞台をつくっていただいたことも学校にとってもよかった。保護者も見れたのでなお、よかった。
3	すべてがメリットだった。デメリットが考えられない。
4	単発じゃなく、時間が必要だったと思う。心と心がつながる時間が必要、回を重ねるごとに関係性ができてきたと感じる。
5	もちろん、受け入れたい。
7	９月から12月まで毎週木曜日の１時間目を使って、ダンスをつくって覚えて発表をする活動。最終的には、学校内で発表会のあと、障害者交流フェスティバルの市のイベントで発表を行った。大学生は４人と今年度から社会人のボランティアが一緒に活動を行った。

４．２　アンケートからわかる学生と地域の関係性

社協では、ボランティアの活動者と受入側を調整する社協ボランティアセンターの立場で、それぞれを調整する中間支援施設としての機能をもっている。中間支援組織としては、ボランティア受入れ側を支援し、ボランティアが活動しやすい場をつくることも重要な機能となっている。内容は、日時、場所、人数、内容だけではなく、そのボランティアが求められている活動をよりよくできるための働きかけや心構え等も伝えることにより、それぞれの立場でかかわる組織や人が目的を達成できるように支援をすることが重要である。

私自身は、鶴ヶ島市社協の職員であると同時に、城西大学経済学部にてサービスラーニングの授業をもっている。中間支援組織としての一面とボランティアを送り出す側でもある。送り出す側としては、学生らが時間に遅れたり、自分勝手な行動をとることにより、受入側に迷惑をかけたりしないかということを常に考えながら、ボランティアを送り出している。

本来ボランティア活動の内容を単なる人足としての活動ではなく、それぞれの良さを活かしあう形でのボランティア活動が必要ではないかと考える。受け入れ先２のダンスボランティアについては、「中学生が大学生に教えることもあった」という場面があった。学生ボランティアが朝早い活動であったこともあり、数回休んでしまったためだ。そんな大学生を見ながら、支援学級の生徒たちは、ボ

ランティアに来てくれることに感謝して、リスペクトしていた。身近な少し年長の彼を見て、多様な価値観を学んだに違いない。それは、認知症対応型グループホームのボランティアについても同じことが言える。学生が高齢者と接したり、施設の役割を知ったりすることで、閉鎖されがちな施設に新たな風が吹き、施設内の関係性も豊かになる。

様々な人たちにかかわり合うことにより、学び合い、認め合う関係づくりができるボランティアの場づくりを見据えながら、送り出す学校側もその受入れ側のニーズや役割をしっかり認識したうえで、送り出すことが重要である。

５．今後の課題

本研究では、ボランティア受け入れ先から社会貢献・地域連携活動の一つであるボランティア活動がどのようにみられているかを調査し分析した。その結果、ボランティア活動がサービスラーニング的要素へ変化している現状において、いくつかの課題を認識することとなった。

５．１　単位認定の必要性

現代政策学部でボランティアを単位認定科目としたいと打ち出したのが2015年である。当初、ボランティア活動は自主的な活動であり、単位認定にすると単位目当ての学生がボランティアを履修することになってしまい、本来のボランティアと意味が違うという批判的な声が非常に多かった。だが、現在、ボランティア活動が地域社会の学びの場であることや、サービスラーニングという要素が含まれていることにより理解が進んできている。

だが、学外の受け入れ機関との良好な関係作りを通して、学生の学びの提供であることを受入れ先に理解を求めなくてはならない。そのためボランティアを担当する担当者は属人的になりやすいという問題をかかえている。アンケートの記載にもあるように紹介者が信頼できる人である必要がある。信頼できる担当者を増やすためにも担当者間で人材を、紹介をするネットワークを広げていく必要があるといえる。

そのうえで、ボランティアを単位認定科目としてサービスラーニング的要素を含んだ評価の対象とする必要がある。しかし、サービスラーニングという言葉自体馴染みを持っている学生が少ないこともあり、ここではサービスラーニング的要素を含んではいるが、やはりボランティアという名前を使用することが多くなるであろう。だが単位を認定することによって、サービスラーニング的要素を含んだ活動であることを周知していかなくてはならない。

５．２　中間支援組織としての機能

今回、ボランティア受け入れ先からのアンケートを取得した筆者ら３名の受け入れ先に同時に言えることは、どの受入れ先も、担当者間で、よく連絡を取りあっているということである。また、受け入れ先の状況や受け入れてもらう学生がどのような学生かなども含みつつ、過剰な期待がないように理解しあえるように対応していた。さらに、受け入れ先も独自に学生と連絡を取り合っており、受け入れ先、学生、組織担当者間での連絡がなされていることも重要な点といえる。互いの理解を深める

ための話し合いの場などが設けられ、LINEやメールなどがやりとりされている。また、学生が現場で活動するだけでなく視察も兼ねて組織担当者も参加するなどの活動が行われており、積極的な交流が行われている。これらの対応は、担当者が他に通常業務を持っている場合、担当者の負担が課題といえる。

５．３　誰もが参加しやすい場

今後、ボランティアにサービスラーニング的要素を含んで活動するならば、学生と地域が対等な立場で協働して問題解決に向かうこととなる。学生たちが、若い労働力としてだけみられるのではなく、地域の課題や懸案を学生が参加することによって実現できた（Narsavage, Lindell, Chen & Duffy., 2002)、という要素を打ち出さなくてはならない。そのためには、学生は、ボランティア参加地域の課題を理解し、受け入れ先もまた自分たちの問題に向き合い、地域理解を深めつつ、誰もが参加しやすい開かれた場にしていく必要がある。また、参加のしやすさは内容や場所ばかりではなく時間についても同様である。一日開催しているイベントや活動である場合、一日いないといけないなどの活動はボランティアに参加する際に学生にとって負担になる場合がある[§]。短時間の参加や参加途中での退出などが責められないような雰囲気づくりが必要であろう。参加できるときには、参加していき無理はしないという仕組み作りが受入れ先や中間支援組織担当者の力量として求められている。

５．４　地域で育てる・学び合うために

大学生の一般的な学習方法としては、キャンパス内で講義を受講することである。アクティブ・ラーニングなどの講義が増えている現在においても、分野系統毎に専門性を深化させることが大学の講義といえる。しかし、現代社会は問題が複雑に絡みあい、専門知識や技術面だけでは対応が難しい。学ぶことの必要性や社会に出た際に、この学がどのような場で役に立つのかを理解することで学ぶことの楽しさが広がっていく。

そのために、ボランティア活動を通して、大学の講義で学んだことを実際の地域の中で実践し問題解決に努めることにより、考える力ややり抜く力が身についていく。これらを繰り返すことにより、学びをより実践的な課題として探求することに面白みを覚えることとなる。地域住民とのコミュニケーションを積極的にとることで、人間性の向上もまた期待できる。

地域によりよい受け入れ先があれば、学びの場は広がる。学生を地域で育て、学び合うことが可能となり、課題解決力の向上や明確な目的意識・責任感を育んでいくことが可能となる。そのためにも、今後も受入れ先のニーズを確認し、よりよい活動を続けるための検討が必要である。そのためにも筆者らもまた調査・研究を継続していきたいと考える。

§　近年、多くの学生がバイトをすることが金銭的に必要というケースが出ている。

引用・参考文献

論文

1）文部科学省　国立教育政策研究所編集（2015）「『自尊感情』？それとも『自己有用感』？」:『生徒指導・進路指導研究センター生徒指導リーフ』.

2）中里陽子・吉村裕子・津曲隆（2015）「サービス・ラーニングの高等学校における位置づけとその教育効果を促進する条件に付いて」『熊本県立大学総合管理学会　アドミニストレーション』22（1），164－181.

3）木村充・河井亨（2012）「サービス・ラーニングにおける学生の経験と学習成果に関する研究 立命館大学『地域活性化ボランティア』を事例として」（＜特集＞大学教育の改善・FD）『日本教育工学会　日本教育工学会論文誌』36（3），227－238.

4）石井三恵他（2009）「大学教育におけるボランティア活動の意義と授業開発・実践・評価～ボランティアセンター設置に向けて～」『広島女学院大学生活科学部紀要』16，p 21－44.

5）上条秀元（2000）「大学教育におけるボランティア実習の意義についての一考察」『生涯学習研究 宮崎大学生涯学習教育研究センター研究紀要』（5），1－13.

書籍

1）齊藤ゆか著（2022）「ボランティア評価学：CUDBASを用いた評価指標の設定と体系化」ミネルヴァ書房.

2）山下美樹編著・宇治谷映子・黒沼敦子・籔田由己子著（2021）「サービス・ラーニングのためのアクティビティ」研究社.

3）早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編（2019）「ボランティアで学生は変わるのか：『体験の言語化』からの挑戦」京都：ナカニシヤ出版.

4）田中暢子編著（2018）「実践で学ぶ！学生の社会貢献：スポーツとボランティアでつながる」成文堂.

5）池迫浩子，宮本晃司著（2015）「家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成～国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆～」『ベネッセ教育総合研究所』.

Student learning through volunteer activities

- Community activities -

YANAGISAWA Tomomi
MAKINO Ikuko
OGAWA Kazuhiro

Key words : volunteer, Community cooperation, Service learning

Abstract

Participating in volunteer activities as a college student can be highly beneficial for gaining experience. Therefore, much research has been conducted from the perspective of college students on the significance of their participation in volunteer activities. However, building a reciprocal relationship would be challenging if there is no benefit for the ones who receive support. This study investigates how the recipients in the volunteer activities perceive the contribution of college students.